

令和2年度 病害虫発生予察 警報第1号

令和2年8月21日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

トビイロウンカについては、令和2年7月21日付けで注意報を発表しましたが、増殖源となる短翅型雌成虫の生息密度が著しく高まっており、今後広域で被害が発生することが予想されます。

本年は、防除を実施した圃場においても本虫の加害による坪枯れが発生する可能性がありますので、圃場内を確認のうえ生息密度の高い圃場では確実に防除を実施しましょう。

- 1 対象病害虫 トビイロウンカ
- 2 対象作物 普通期水稻
- 3 対象地域 県内全域
- 4 発生面積 多い
- 5 発生量 多い

6 警報発表の根拠

- (1) 農林水産研究指導センター（豊後大野市三重町）の病害虫発生予察田における8月14日の調査では、成幼虫数は25株あたり3.3頭で平年の1.4頭より多く、坪枯れが多発した昨年の3.3頭と同じである。
- (2) 8月17～20日の巡回調査では、県内40圃場中10圃場で「少」発生を確認した。また、8月中下旬の要防除水準1頭/株を超えた圃場が10圃場（全体の25%）で確認され、坪枯れが多発した昨年の4圃場（全体の10%）より多くなっている。
<普通期水稻における発生状況>
発生圃場率：25.0%（平年：7.3%、前年：10.0%）
株当たり虫数：0.35（平年：0.2、前年：0.6）
- (3) 短翅型雌成虫が40圃場中17圃場で確認され、今後増殖の拡大が懸念される。
- (4) 九州北部は7月30日に梅雨明けして以降、高温少雨傾向が続いており、トビイロウンカの成育に好条件で推移している。8月20日の気象予報によれば、向こう1か月の気温は平年より高く降水量は平年並と予想されており、本虫の増殖に好適条件が続くと考えられる。

7 防除上注意すべき事項

- (1) 粉剤、液剤の防除適期である第2世代若齢幼虫の発生時期は、8月下旬と考えられる。8月中旬から下旬に成幼虫が1頭/株以上生息している場合は、手遅れにならないように早急に薬剤散布を行う。
- (2) 現在発生が少ない圃場でも今後の気象条件によっては増加する可能性があるため、圃場での発生状況を確認し、要防除水準（短翅型雌成虫が10株当たり2頭以上）を超える場合は直ちに防除を行う。
- (3) 本虫は株元に生息するので、薬剤が株元に到達するように注意する。また、畦畔よりも水田の中央部に発生しやすいので水田内をよく確認する。

- (4) 坪枯れが発生した圃場では可能な限り収穫を早めて、倒伏に伴う減収を防ぐ。収穫までに期間がある場合は、薬剤の収穫前日数に注意しつつ、早急に防除を行う。なお、坪枯れが発生した圃場の場合、坪枯れを起こしている周辺に本虫が密集しているので、特に留意する
- (5) 基幹防除を実施しても密度が低下しにくい場合もあるので、9月下旬まで注意を怠らないようにする。また、栽培期間の長い晩生品種、もち品種、新規需要米等は被害が拡大する傾向があるので発生状況を確認する。
- (6) 防除薬剤は、大分県農林水産研究センター農業研究部病害虫対策チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照し、収穫期の近い水稻では農薬使用基準（使用時期、使用回数等）に注意する。
(ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/oita/>)

